中国古車類聚

中島達夫

まえがき

中国における車の創始者は、伝説的には黄帝軒轅といわれ、また史実的には夏の奚仲、殷の相土・王亥の名があげられているが、いずれにしろ中国の車は数千年の歴史をもっているといえよう。この車ははじめは戦闘用として開発され、ついで宮廷・諸侯さらに高官用の乗りものとして格式化・高級化され、それとともに運搬用として大衆化・実用化されたものとみられる。この間の社会的事情を知るには中国の文学的・史記的古典を調べるのが有効である。筆者は前誌18)19)で、中国古詩および孔老・諸子百家の著述にみられる車の記述について調べた。

ある事物に対し人々の関心が強ければ強いほど、その事物は細かく分類されて表現されるという。アラビア語には砂漠をあらわす語が五十、駱駝をあらわす語が三百あるといわれるが、中国の古典にあらわれる車の名称の種類の驚くべき多さは、中国人の車に対する愛着・関心の強さを示すものということができよう。そこで本篇では中国古典にあらわれる車に関する記述から車種名による分類を試みた。時代的には西歴紀元前数世紀より紀元後数世紀の範囲が主体をなしているが、それに限定したわけではない。ただこの時代はわれわれが教養的に最も関心のある中国古典が数多く生れた時代であり、それとともに中国で車が最も重用された時代でもあったようである。

本記では、車種名、その説明、その車名のあらわれる古文(和訓)と文献名を、車種名の五十音順に並記した。名称が異っても同種のものはまとめて記し、また同じ名称でも異った用途のものをさすときにはそれを説明欄に列記した。

記

安車(あんしゃ)　坐乗する車で、低蓋一馬の老人・婦人用の小車

卑辞安車　因って弁士をして固く請はしめば宜しく来るべし　(史記　留侯世家)

安車大駕せば梁の孝王を以て寄と為す　(史記　梁孝王世家)

上(しょう)　使者をして安車蒲輪・束帛加璧を奉じて魯の申公を迎えしむ　(十八史略　西漢)

役に行くには婦人を以てし　四方に適くには安車に乗る
（礼記　曲礼上）

衣車　衣服を載せる車　おほひのある車　婦人用の車
衣車は前戸以て衣服を載する所の車也　（釋名　釋車）

雲車・雲気車・雲露車　雲までとどく車　非常に高い車　雲を画いた車　仙人が乗る雲の車
蓬莱の織女は雲車を回す　（杜甫　送孔巣父）
遂に王の為めに力を致し　中鳴雲露車に乗る　（世説　識鑒）

雲梯　雲にとどくほど高いはしごをもつ車、攻城用
公輸盤　楚の為めに雲梯の械を造りて成る　（墨子　公輸）
雲梯は重器なり　其の移動は甚だ難し　（墨子　備梯）

雲母車　雲母で飾った車、王子に下賜される
偽りの輦及び雲母車を得　（世説　謝車騎伝）

役車　農車、四角の箱をつけ牛でひく　大八車
蟋蟀堂に在り　役車其れ休す　（詩経　唐風）
大夫は墨車に乗り士は棧車に乗り庶人は役車に乗る（周礼　春官）

塩車　塩を運ぶ車
驥は両耳を垂れ塩車に服す　（史記　屈原伝）

轀輬・轀輬車・轀車・温車　窓を開閉して温くしたり涼しくする車　死骸を乗せる車
棺を轀涼車中に載す　暑に会い上の轀車臭し　（史記　秦始皇紀）
轀輬東へ来って祖竜死す　（王子禎　清詩）
桓公の鉤に中てらるや祥り死し以て管仲を誤らす　已にして温車中に載りて馳せて行く　（史記　斉太公世家）
始皇を轀輬車の中に載せ　一石の鮑魚を以て其の臭を乱す　（十八史略　秦）

華軒　貴人の乗る豪華な車
昧早華軒に趍る　（王維　同盧拾遺）
華軒に更に一たび嘶くことを得ず　（薛涛　馬離厩）
金張は貂冕を服し　許史は華軒に乗る　（江文通　文選）

瓜車　瓜を積んだ車
瓜車反覆すれば我を助くる者少く瓜を啗ふ者多し　（古詩源　楽府歌辞）

革車・革輅　革で装備した兵車
革車八百乗・甲首三千を獲て以て公に獻ず　（左氏　哀十一）
成方十里革車一乗を出す　（詩経　魯頌　集伝）
武王の殷を伐つや　革車三百両・虎賁三千人　（孟子　尽心下）
元年に革車卅乗　季年には乃ち三百乗あり　（左氏　閔）

客車　賓客の乗る車
客車は大門に入らず　婦人は立ちて乗らず　（礼記　曲礼上）

獲車　狩りのえものを積む車
指顧倏忽　獲車已に実つ　（文選　東都賦）

檻車・轞車　囚人の乗る車、四方を板で囲う
即ち反接して檻車に載せ　伝して長安に詣らしむ　（史記　陳丞相世家）
檻車鎖頸　伝して長安に詣る　（十八史略　西漢）

轞車に詣りて與に別る　（世説　黜免）

官車　官有の車

官牛官車に駕し　滻水の岸辺より沙を般載す　（白居易　官牛）

還車・還駕　故郷へ帰る車　戻り車

還車病身を載す　（李賀　出城）

載ち脂さし載ち鞂し　車を還して言に邁く　（詩経　邶風）

鳳台には還駕無く　簫管の遺声有り　（鮑明遠　文選）

駕　車に馬をつける　のりもの　うま　天子の乗物

始め玆の山中に来り　駕を休めて地の僻なるを喜べり　（杜甫　発同谷）

まだ枉げず周王の駕　終に期す漢武の巡　（杜甫　唐詩選）

故人の駕を枉ぐるにあらずんば平生扉を掩ふこと多し　（王維　喜祖三）

駕を命じて北山に登り　延佇みて城郭を望む　（陸機　有所思行）

門を出でて韡帽を厭い　駕を税いて巾屨を喜ぶ　（黄山谷　和答）

朝朝駕を整えて星光を趁ふ　（曽国藩　清詩）

且つ少く君が駕を停めて徐ろに干戈の戢まるを待て　（潘正叔　文選）

今の県令一日身死すとも　子孫累世駕を絜ぬ　（韓非子　五蠹）

君命じて召せば駕を俟たずして行く　（論語　郷党）

僕夫駕を整ふ雞鳴の前　（高啓　送葉卿）

駕駟　四馬の車駕

送るに安車駕駟・束帛加璧・黄金百鎰を以てす（史記　淳于髡伝）

駕乗　のりもの

人体駕乗に安んず　（史記　礼書）

臥車　伏臥して乗る車

帝疾甚し　徒臥車を御す　（後漢書　皇后紀）

畫輪車　車輪に文様をえがいた乗用車　大駕の副車

方轑かけし畫輪車　（王維　上張令公）

蓋　車のおほひ　くるま

清夜に西園に遊び　蓋を飛ばして相追随す　（曹子建　文選）

流雲は行蓋に起り　晨風は鑾音を引く　（范蔚宗　文選）

軒蓋は已に雲のごとく至る　（鮑明遠　文選）

冠蓋は縦横に至り　車騎は四方より来る　（鮑明遠　文選）

蓋車　おほひのある車

王は青蓋車　皇孫は緑蓋車　（晋書　輿服志）

軌　車輪間隔　くるま

軌を発せしときは夷易を喪ふ　（顔延年　文選）

奇車　規格外れの車

国君は奇車に乗らず　（礼記　曲礼上）

麴車　酒のこうじを積んだ車

道に麴車に逢うて口に涎を流す　（杜甫　飲中八仙）

宮車　御所車

貴人冷落す宮車の夢　（呉偉業　清詩）

宮車一日晏駕す　（史記　范睢伝）

輦・輦車・輦輦　大きな馬車　手押し車

輦車四十乗を以て谷口に反せしむ　（史記　淮南伝）

虚車　空車

三尺の岸にして而も虚車登ること能はず　（荀子　宥坐）

巾車　布帛でおほって飾った車

或いは巾車を命じ或いは孤舟に棹さす　（陶潜　帰去来辞）

校人は馬を乗にし　巾車は轄に脂さす　（左氏　哀三）

金車・金輅・金駕・金輿・金鸞・金輦　天子・皇族などの乗車　金色の車

金車玉もて輪を作す　（古詩源　古詩　為焦仲卿）

伏秦して金駕を廻らす　（王維　上張令公）

金輅春遊して博望開く　（賈曽　唐詩選）

当時金輿に侍せしもの故物独り石馬のみ　（杜甫　玉華宮）

復た見る金輿の紫微より出づるを　（李邕　唐詩選）

金鸞問ふこと莫れ残鎧の事　（王閬運　清詩）

応に慣れ識る当年の翠屏金輦　（周密　法曲献仙音）

戯車　戯を演ずる車

戯車を建て脩旋を樹て　（文選　西京賦）

牛車　牛のひく車、高貴の人は乗らず

将相或いは牛車に乗り　斉民に蔵蓋なし　（史記　平準）

其の後諸侯の貧しき者には牛車に乗るもの或り　（史記　五宗世家）

白牛車遠近且つ慈航に上らんと欲す　（杜甫　上兜率寺）

載するに牛車を以てし　棺ありて椁なし　（史記　酷吏伝）

魚軒　魚の皮で飾った婦人用車、諸侯の夫人が乗る

夫人に魚軒・重錦卅両を帰る　（左氏　閔）

玉車・玉路・玉輅・玉輪・玉乗・玉軒　玉で飾った車　天子の乗物

玉車早に到る殿の西頭　（呉偉業　清詩）

玉輪露に軋り團光を湿ほす　（李賀　夢天）

玉路旋た悲しむ車轂の鳴るを　（王閬運　清詩）

玉乗大客を迎へ　金節諸侯を送る　（王維　唐詩選）

玉輅に登り時龍に乗る　（文選　東都賦）

俠客は絶景を控き　都人は玉軒に驂す　（陸士衡　文選）

玉輦・玉輓・玉鑾　玉をちりばめた車　天子の車輿　美しい手車

玉輓鳴って轗軻たり　（李賀　出城）

玉鑾重嶺応じ　緹騎薄雲迎ふ　（張説　唐詩選）

天は玉輦を回らして花を繞って行く　（李白　侍従宜春苑）

玉輦縦横主第を過り　金鞍絡繹侯家に向ふ　（盧昭鄰　唐詩選）

君車　君公の車

竊かに君車に駕する者は罪刖に至る　（史記　韓非伝）

禺車　木で作った車　木偶車

禺車各一乗　（史記　封禅）

軽車・軽軒　はやく走る軽快な車　兵車

軽車迅く邁き彼の長林に息ふ　（嵇康　古詩源）

良馬は鞍を廻さず　軽車も轂を転ぜず　（秦嘉　古詩源）

軽車重馬にて東して就きて食ふ　（史記　秦始皇紀）

軽車先に出で其の側に居るは陳するなり　（孫子　行軍）
翼翼として軽軒を飛ばす　（陸士衡　文選）
将に軽車千乗を為りて以て斉の師の門を圧せんとす　（左氏　哀二七）

軽武　軽快な戦車　軽車と武車
軽武を後陳に総べ　（文選　東京賦）

雞棲車　みすぼらしい車
独り雞棲車に乗り　自ら風調の少きを覚ゆ　（李賀　春帰）

軒　轅（ながえ）が上曲し、両側におほひをした車　大夫以上の乗用車　車の通称　車輿、車の人の乗るところ
軒を廻らして軽蓋を駐む　（鮑照　古詩源）
美女の軒に乗る者三百人　（史記　晋世家）
衛の懿公鶴を好む　鶴の軒に乗る者あり　（左氏　閔）
軒に乗り絻を載く　（荀子　正名）

軒車・軒輅・軒駕　大夫以上の人の乗用車、轅が上方に反って前高
君を思へば人をして老いしむ　軒車何ぞ来ること遅き　（古詩源　古詩十九）
冠剣時に釋く無く　軒車漏を待って飛ぶ　（沈佺期　唐詩選）
軒車歌吹都邑に誼し　（白居易　長安早春）
軒車行色を動かし　糸管離声を挙ぐ　（白居易　乃弟後）
軒駕を時に来り肅め　（范蔚宗　文選）

軒轅　大夫以上の人の乗物、轅の高いもの
前に楼闕軒轅有り　後に長姣美人有り　（史記　蘇秦伝）

軒輬・輬　おほひのある臥車
軒輬既に低れ歩騎羅なる　（楚辞　招魂）

轒　くるまのとばり　車
舟に乗りて能く月に上り　轒を飛ばして天を捫らんと欲す　（庾信　擬詠懐）
青牛・紺轒　紅塵度る　（駱賓王　唐詩選）

堅車・堅　堅木で作られた立派な車、好車ともいう
堅車に乗り駟馬に駕す　（古詩源　楽府歌辞）
堅に乗り良を馳せ狡兎を逐う　（史記　越王世家）

遣車　埋葬のときに供物を載せる小車
遣車は牢具に視ふ　（礼記　雑記上二十）
国君は七个遣車七乗　（礼記　檀弓下）

兼車　つなぎ合わした車
青石藍田の山より出で　兼車運載して長安に来たる　（白居易　青石）

下車　粗悪な車　葬るとき墓穴に入れる車
下車七乗　兵車を以てせず　（左氏　襄二五）

玄路・玄輅　黒塗りの車
玄路に乗り鉄驪を駕し　（礼記　月令）

元戎　大きな兵車　大戎
元戎十乗以て我が行を啓く　（詩経　小雅）
十日元戎期せども至らず　（莫反芝　清詩）

元戎野に竟り　戈鋋雲を彗ふ　（文選　東都賦）

固車　堅固な車

良馬固車に託せば則ち臧獲も余り有らん　（韓非子　外儲右上）

今此に固車良馬有り　又此に駑車四隅の輪あり　（墨子　魯問）

鼓車　太鼓をのせる車　天子の鹵簿

今日翔鱗の馬　先づ宜しく鼓車に駕せしむべし　（杜甫　復愁）

鼓吹車　大駕の副車、白鷺車と同じ

白鷺車は隋の制する所なり　一に鼓吹車と名づく（宋史　輿服志）

甲車　兵車

兵を邾の南に治む　甲車四千乗　（左氏　昭十三）

甲車三百乗を以て我に従はざる者あらば此の盟ひの如き有らん　（左氏　定十）

公乗　君公の兵車

公乗に人無く卒列に長無し　（左氏　昭三）

公車　兵車または官用車

士を薦めて公車に満てしむ　（王維　上張令公）

公車千乗・朱英緑滕・二矛重弓・公徒三万　（詩経　魯頌）

皇輿　天子の車

皇輿の敗績せんことを恐る　（楚辞　離騒）

汎掃して皇輿を迎ふ　（陸游　観大散関）

皇輿は三極の北　身事は五湖の南　（杜甫　楼上）

皇輿夙に駕し東海に輦く　（文選　東京賦）

香輦　天子の車

行いては香輦の登仙の路に随う　（沈佺期　唐詩選）

香車・香輪　香木で作った豪奢な車　婦人用の車

香車繋ぎとむるは誰が家の樹ぞ　（馮延己　蝶恋花）

香輪青青を輾り破ること莫かれ　（鄭谷　曲江春草）

親労す使君の問　南陌に駐める香車　（王維　雑詩五首）

長安の大道狭斜に連なる　青牛・白馬・七香車（盧昭鄰　唐詩選）

門前に初めて下る七香車　（王維　劇嘲史寰）

高車・高蓋・高駕　蓋（きぬ笠）の高い立派な車

高車塵未だ滅せず　珠履故より声を余す　（沈約　古詩源）

早歳同袍の者　高車何処に帰かん　（王維　喜祖三）

駟馬高蓋其の慮大なり　（朱虚侯章　古詩源）

南巷に貴人有り　高蓋駟馬の車　（白居易　效陶潜）

高駕攀援し難し　（王維　同盧拾遺）

君子高駕を聳げ　塵軌実に林を為せり　（王僧達　古詩源）

広車　兵車で横隊の陣形に用いる　大車

広車を御して行かしめ　己は皆乗車に乗る　（左氏　襄二四）

智伯将に仇由を襲わんとするや　之に遺るに広車を以てす　（韓非子　喩老）

広柳・広柳車・柳車　棺をのせる喪車　覆いのついた大車

褐衣を衣せ広柳車の中に置く　（史記　季布伝）

龍幌は広柳を被ひ　前駆は軽旗を矯ぐ　（陸士衡　文選）

素驂広柳に駕し　蕭蕭として城闉を出づ　（高啓　蒿里歌）

後車・後乗・後輪・後駕　荷物などを積む副車　後続の車

後車数十乗・従者数百人　以て諸侯に伝食す　（孟子　滕文下）
雷音後車遠く　事往落下の時　（杜牧　杜秋娘）
武士をして信を縛せしめ後車に載す　（史記　准陰侯伝）
書を作って後乗に寄す　（黄山谷　寄裴）
仍聞く後乗に載せ　籠燭嬋娟を照らすと　（黄山谷　次韻曾子）
前駆は燧を挙げ　後乗は旌を抗げ　（曹子建　文選）
瞻望して賈寧が後輪中に在るを見　（世説　賞誉）
子瑕は後駕を矯り　安陵は前魚に泣く　（陸韓卿　文選）

鉤車・鉤援　車台の床の前方をそらせた城攻めの車

三載凡そ百戦　鉤車其の牆を望むを得ず　（杜牧　群斎）
爾の鉤援と爾の臨衝とを以て　以って崇墉を伐て　（詩経　大雅）

袷輅　ひかえぐるま

飛雲の袷輅を結び　翠羽の高蓋を樹つ　（文選　東京賦）

黄屋・黄屋車　車蓋の内側を黄色のきぬで飾った車　天子の乗用車

黄屋草生じ　棄てて遺るるが若し　（白居易　八駿）
黄屋を車にし　百司を従え七廟に謁す　（史記　秦始皇紀）
今に至るも黄屋尚ほ東巡す　（陸游）
都を傾けて黄屋を看る　（杜甫　巴西）
黄屋の蓋を為り東輿天子に擬す　（史記　准南伝）

行輈・行輪・行軌　行く車、輈は車のながえ

天寒く行輈を絶つ　（高啓　聞長槍兵）
丹雞白犬行輈に随う　（王漁洋　膠東）
花蔓行輈を閃げ　（李賀　春帰）
里には曲突の煙無く　路には行輪の声無し　（張景陽　文選）
悲風は行軌を徽め　傾雲は流藹に結ぶ　（陸士衡　文選）

国車　一般用霊柩車　軽車

士の葬には国車を用ふ　（礼記　喪大記二二）

魂車・魂輿　死者の衣冠を載せる車　薦車

魂輿は寂として響き無く　但だ冠と帯とを見るのみ　（陸士衡　文選）

伍乗　五人を一組として同乗する兵車

伍乗に死せざるは軍の大刑なり　（左氏　昭二二）

佐車・佐乗・佐輿　そへ車　副車、貳車　狩で獣を追い出すのに用いる車

鄭周父佐車に御となり　宛茀右と為る　（左氏　成二）
馬驚きて敗績す　公隊つ　佐車綏を授く　（礼記　檀弓上）
大夫殺あれば則ち佐車を止む　（礼記　王制）

柴車　破れてみすぼらしい車

日暮柴車を巾り　路闇くして光已に夕なり　（江淹　古詩源）
天平の松竹　黄泉の水　早晩柴車共に遊ぶを得ん　（劉祁　贈鮮）
駿足は長阪を思ひ　柴車は危轍を畏る　（陸韓卿　文選）

犀車・犀軒　堅牢な車　犀の皮で飾った車

陸行には犀車良馬あり　水行には軽舟便檝あり

之に犀軒と直蓋とを与えて先づ之を帰す　（韓非子　姦劫弑臣）

載　くるま　のりもの　（左氏　定九）

退きて載を命じて行らんとす　（史記　孔子世家）

載を出して立つ　其の広さ隧を終ふ　（墨子　備梯）

載を竝べて鄴京に遊び　舟を方べて河の広きに汎ぶ　（謝霊運　文選）

棧車・棧軫　竹木を編んで棚にして作った粗末な車　荷車

棧車あり彼の周道を行く　（詩経　小雅）

孫叔敖　楚に相たり　棧車・牡馬　（韓非子　外儲左下）

駑馬棧車　（列子　力命）

輚輅　竹材を箱型に編み、帷を張る、人がひく　臥車

後宮輚輅に乗り　龍舟に登る　（文選　西都賦）

紫軑　天子の車、紫色の蓋が用いられる、軑は輪のこと

青精は紫軑を翼け　黄旗は朱邸を映す　（謝玄暉　文選）

輜重・輜重車・輜車・輜車・輜駕　荷車

これを徒すに輜重を用いず　（史記　日者伝）

聖人は終日行けど輜重を離れず　（老子　上二六）

軍　輜重無ければ則ち亡び　糧食無ければ則ち亡ぶ（孫子　軍争）

上　病むと雖も強いて輜重に載り臥してこれを獲れ　（史記　留侯世家）

間道より其の輜重を絶たん　（史記　准陰侯伝）

孫子を師と為し輜重の中に居り　坐して計謀を為す　（史記　孫子伝）

指南車　南の方向を指示する装置をもつ車　黄帝が蚩尤との戦いに用いたとも周公がはじめて用いたともいわれる

先王は司南を立てて以て朝夕を端す　（韓非子　有度）

軒轅　指南を作り　蚩尤と涿鹿の野に戦って之を禽にす　（十八史略　三皇）

指南車常に先導を為す　（十八史略　五帝）

兪騎路に轉せ　指南方を司る　（文選　呉都賦）

四望車　高貴の人が乗る、四周が見える車

出入には四望車に乗り　（世説　荀綽　兗州記）

車　箱形の輿に回転輪をとりつけ、人や物を載せて運ぶもの　車の人の乗るところ、こし

車中にては内顧せず疾言せず親指せず　（論語　郷党）

車は重きを服して遠きを致すが為めなり　（墨子　節用）

湯は車九十両を以て鳥陳雁行す　（墨子　明鬼下）

奚仲は車を作り　巧重は舟を作る　（墨子　非儒下）

其れ函車の獸も介りにして山を離るれば則ち罔罟の患いを免れず　（荘子　庚桑楚）

其れ水行には舟を用いるに如くは莫く　陸行には車を用いるに如くは莫し　（荘子　天運）

君は車に乗り我は笠を戴くとも　他日相逢はば車を下りて揖せよ　（古詩源　越謡歌）

車轔轔　馬蕭蕭　行人弓箭各々腰に在り　（杜甫　兵車行）
太行の路よく車を摧くも　もし人の心に比すれば是れ坦途　（白居易　太行路）
三十の輻は一穀を共にす　其の無に当りて車の用あり　（老子　上十一）
五十にして車無き者は彊を越えて人を弔はず　（礼記　檀弓下）

車駕　天子の乗る車　鳳輦、鸞輿
即日車駕西し関中に都す　（史記　劉敬伝）
車駕洛陽に入り遂に之に都す　（十八史略　東漢）
頑悪を斬除して車駕を還さん　（岳飛　宋）

車騎　馬車　兵車と騎車
車騎輜重王者に擬す　（十八史略　春秋戦国）
車騎の馬乏絶す　（史記　平準）
山上より丞相の車騎の衆きを見て善しとせず　（史記　秦始皇紀）
車騎甚だ盛んに　五六十里の中　旌旗隙を蔽ふ　（世説　規箴）

車乗　くるま
車乗進用饒かならず　（史記　呂不韋伝）
翹翹たる車乗　（古詩源　左伝引逸詩）
爾の車乗を戒め　爾の君事を敬め　（左氏　僖）
車乗を従へず　干戈を操らず　（史記　商君伝）

車輜　荷車
車輜畜産　畢く収めて鹵と為す　（史記　衛将軍伝）

車箱・箱　はこぐるま　車の人や物を入れるところ
雙鬟の小女　車箱に坐す　（張耒　上元都下詩）
牽牛の箱に服くに非ざるがごとし　（陸士龍　文選）

車重　荷車
乃ち晋に奔る　車重千乗あり　（史記　秦紀）
車重は大将軍の軍と等し　（史記　驃騎伝）

車梯　梯子をもつ四輪車、前高後低
両輪高く両輪端と為す　車梯なり　（墨子　経説下）

車輿・車轝　くるま
人衆く車轝万物毀富　（史記　陸賈伝）

車轅　くるまと手ぐるま
景帝は益々王を疏んじ　車轅を同じうせず　（史記　梁孝王世家）

車路・車輅　くるま　天子の車
出づる毎に車路の左に降り　塵を望みて拝す　（晋書）

車輛・車両　くるま
聚り観る車両　争って駢闐　（翁方綱　清詩）

藉車　巣車　車上にやぐらをもつ軍用車
城上二十歩に一藉車あり　（墨子　備城門）

酒車　酒肴を載せた車
酒車を騰げて以て斟酌す　（文選　西都賦）
酒車もて礼を酌み　駕を方べて饔を授く　（文選　西京賦）

朱路・朱軒　赤塗りの車
朱路に乗り　赤駵を駕し　（礼記　月礼）
朱軒は金城に曜き　供帳は長衢に臨む　（張景陽　文選）

朱輪　朱塗りの車、大官が用う

車を懸けんとして朱輪を惜む　（白居易　不致仕）

遙かに見る朱輪の来りて郭を出づるを

冠蓋は四術を蔭ひ　朱輪は長衢に竟る　（白居易　初到江州）

躍馬跡を畳ね　朱輪轍を累ぬ　（左思　古詩源）

箑　そへぐるま、副車　（文選　呉都賦）

属車の箑　猿猲獟を載す　（文選　西京賦）

衆車　随行車　多くの車

路脩遠にして以て艱み多く　衆車を騰せて径に待たしむ　（楚辞　離騒）

衆車純門より入り　逵市に及ぶ　（左氏　荘）

胥車　荷車　輜重車　重車

施れば則ち之が胥車を助く　（墨子　非儒下）

祥車　葬礼のとき用いる死者生前の車

祥車は左を昿しくす　（礼記　曲礼上）

小車　小さな車　駟馬車

小車羊に駕して声陸続たり　（陸游　小児輩）

大車輗無く小車軏無くんば其れ何を以てか之を行らんや　（論語　為政）

応に小車に駕して白羊に騎るべし　（李白　送蕭）

衝車・衝・武衝　横から敵を突き破る兵車

衝を駆りて競ひ　大いに獲て帰る　（左氏　昭十三）

公　斉を侵し廩丘の郛を攻む　主人衝を焚く　（左氏　定八）

衝・臨・梯　皆衝を以て之を衝く　（墨子　襍守）

幢　輣・衝　輣・衝　櫓

兵車　幢・衝は敵陣をつき破る、輣はやぐらのついたもの

威暢びて幢輣を捐つ　（韓愈　城南）

小戎　兵車、群臣が乗る　元戎に対す

小戎俴収　梁輈を五楘す　（詩経　秦風）

小戎を御し　軽軒に撫る　（文選　東京賦）

象車・象路・象輅・象輿・象輦　象牙で作った車

象にひかせる車　助祭のときの副車　万象を彫刻した車

象車に駕して蚊竜を六にす　（韓非子　十過）

象輿西清に婉蟬す　（史記　司馬相如伝）

軺車・軺・乗軺

一般に乗用される一頭立て小馬車　使者の乗る車

商賈の人の軺車は二算　（史記　平準）

其の軺車百乗・牛車千両　（史記　貨殖伝）

矢を載するには軺車を以てす　（墨子　襍守）

弟子二人軺伝に乗り従い至り天子に見ゆ　（史記　儒林伝）

公服を著け軺車に乗り　（世説　傷逝）

飾車　豪華な車　大夫以上の人の乗車

簡子の家　飾車数百乗　（墨子　貴義）

棧車其の弇を欲し　飾車其の侈を欲す　（周礼　冬官考工記）

軫　車の横木　くるま

軫を青部の路に結らし　廻かに蒼江の流れを瞰る（謝兆　古詩源）

軫を諸侯に還らすは窮困と謂ふべし　（国語　晋四）
軫を清洛の汭に発し　馬を大河の陰に駆る　（陸機　古詩源）
軌を方べ軫を斉うして陽瀕に祓ふ　（文選　南都賦）
此の塵外に軫を肅む　（殷仲父　文選）

轜車・轜軒・輌車・霊轜・仙轜

殯を啓いて霊轜を進む　ひつぎ車　喪車　（陸士衡　文選）
素驂は轜軒を佇ち　玄駟は飛蓋を駑す　（陸士衡　文選）

貳車・貳広・次車・次乗・次路

そへぐるま　あとに続く車　副車　後車

貳車に乗れば則ち式す　佐車には否せず　（礼記　少儀十七）
黄寅をして**貳**車に登らしむ　（左氏　昭二十）
次車の乗は渠黄を右服とし踰輪を左にす　（列子　周穆王三）
孔子をして次乗と為らしめ　市を招揺して之を過ぐ　（史記　孔子世家）
子産に次路再命の服を賜ひ　六邑に先んず　（左氏　襄二六）

従車　おともの車

君の出づるや後車十数　従車甲を載す　（史記　商君伝）

戎車・戎軒・戎路・戎輅・戎

六月棲棲たり　戎車既に飭ふ　兵車、甲士三人乗る　（詩経　小雅）
筆を投じて戎軒を事とす　（魏徵　唐詩選）
戎車既に安く　輊の如く軒の如し　（詩経　小雅）
公　戎路を喪ひ　伝乗して帰る　（左氏　文二）
歩揚　戎に御となり　家僕徒右となり小駟に乗る　（左氏　僖）
吾戎路に二位有り　敢へて恥じざらんや　（左氏　襄十四）
遂に戎車三百乗・虎賁三千人・甲士四万五千人を率い　以て東して紂を伐つ　（史記　周紀）
戎路に乗り白駱を駕す　（礼記　月令）

乗　一車四馬をいう　兵車と兵数を数える語　一乗には士三人が乗り、卒七十二人、輜重二十五人がつく

兵を簡び乗を蒐め馬に秣かふ　（左氏　襄二六）
乗に託しては還た徵す鄴下の才　（賈曽　唐詩選）
千乗万騎　北邙に上る　（古詩源　巻四）
万乗の国其の君を弑する者は必ず千乗の国なり（孟子　梁恵王上）
上大夫は二輿二乗　中大夫は二輿一乗　下大夫は専乗なり　（韓非子　外儲左下）
甲兵を繕ひ卒乗を具へ　将に鄭を襲はんとす　（左氏　隱）
三子各々其の乗を毀つ　（左氏　襄十一）
公孟の不善は子の知るところなり　乗に與ること勿かれ　（左氏　昭二十）

乗車　乗用の車

召護をして乗車を駕せしむ　（史記　衛康叔世家）
校人に命じて乗車に駕せしむ　（左氏　哀三）
兵車の属六　乗車の会三　（国語　斉）
乗車の左轂に升り　其の綏を以て復す　（礼記　雑記上三十）
人をして其の乗車を以て行を于さしむ　（国語　晋五）
魯の定公且に乗車を以て好往せんとす　（史記　孔子世家）

乗輿・乗輿車・乗輿車駕・乗輦　天子の車

滕公迺ち乗輿車を召し　小帝を載せて出づ　（史記　呂后紀）

乗輿翠蓋を擁し　扈従す金城の東　（李白　還山）

敬んで乗輿に従って此の地に来る　（沈佺期　唐詩選）

乗輿敗績す　（十八史略　西晋）

乗輿御物は之を主治せん　（漢武帝　古詩源）

乗軒　天子の乗る車

苟し能く我を国に入れなば　子に報ゆるに乗軒を以てせん　（史記　衛康叔世家）

乗軒轂を竝べ　（文選　東京賦）

乗広・広　兵車　広は戦車十五乗からなる

楚子乗広三十乗を為り　分ちて左右と為す　（左氏　宣十二）

史皇其の束広を以いて死す　（左氏　定四）

晋人或は広の隊ちたるを以て進むこと能はず　（左氏　宣十二）

乗路・乗輅・乗輦　のりもの

乗路は周の路なり　（礼記　明堂位十四）

常車　儀装車

武王の弟叔振鐸　常車を奉陳す　（史記　周紀）

人車　人にひかせる車

桀・紂　人車に駕すと聞く　（世説　嵇康　高士伝）

翠輦・翠輅　翡翠（かわせみ）の羽根で飾った天子の乗車、手車　皇后の乗る車の一種

眼のあたり看る春の又去るを　翠輦曽て過らず（令孤楚　唐詩選）

行雲翠輦を霑ほす　（李賀　追賦）

斉車　祭礼用の車　黄金で飾った車

丈夫の斉車は鹿幣・豹犢す　（礼記　玉藻十三）

斉車に載せて行き舎する毎に奠す　（礼記　曽子問）

征駕・征軒・征軸・征輪・征驂　旅行く車　征伐に行く車馬

遙遙として征駕遠ざかり　杳杳として白日晩る　（鮑照　古詩源）

征軒に巾して阻折を歴　（李白　鳴皐）

暗に珠露を垂らして泣き　征輪を送る　（韓縝　芳草）

連翩として征軸を戒む　（謝玄暉　文選）

青蓋・青蓋車　青いおほひのある車で、皇太子・皇子または王が用う

庚子の歳　青蓋当に洛陽に入るべし　（十八史略　西晋）

斥馬車　天子が平常使用しない車

列侯の甲第　僮千人・乗輿・斥馬車・帷帳・器物を賜う　（史記　孝武紀）

選車　すぐれた兵車

是に於て乃ち選車を具へ千三百乗を得　（史記　廉頗・藺相如伝）

李牧乃ち其の知能を尽すを得　選車千三乗を遣る（史記　馮唐伝）

戦車　軍用車　兵車

戦車に命じて道路に満たしむ　（史記　韓世家）

奮戦百万　戦車千乗　（史記　范睢伝）

先路・先輅　祭礼のとき用いる第二級の車（第一級は

大路）　卿の正車、象路

大路は繁纓一就　先路は三就　次路は五就なり　（礼記　郊特性十一）

三帥に先路三命の服を賜ふ　（左氏　成二）

奉引既に畢り　先軨乃ち発す　（文選　東京賦）

仙車　仙人の車　仙鑣

化して仙車と為り　四鹿に驪駕し　（文選　西京賦）

輲・輲車・輲輪・輕

輻のない円板の車輪（輲）を用いた、柩を載せる車

家に至りて輤を説き　載するに輲車を以てす　（礼記　雑記上）

轜　士の乗車、棧車　兵車　安臥できる車、臥車

丑父轜中に寝ぬ　蛇其の下より出づ　（左氏　成二）

氈車　毛氈を張りめぐらした車

氈車夜宿る陰山の下　（唐詩選　無名氏）

鮮車　あざやかな色の車

鮮車黄穀を駑せ　汗馬銀鞍を躍らす　（徐悱　古詩源）

旃車　旃（目印しの赤旗）を立てた車

過ぎゆく旃車は水の流るるが似し　（元好問　発已）

百年此の地に旃車発せり　易水迢迢雁行して没しぬ　（元好問　西園）

素車・素軒　白木の葬儀車　飾りのない車

白輿・素車　路を争うて行く　（白居易　勧酒）

杜伯は白馬素車に乗る　（墨子　明鬼下）

素車の乗あるは其の樸を尊ぶなり　（礼記　郊特性十一）

素車白馬　頸に繫くるに組を以てす　（十八史略　秦）

素車樸馬　北に入ること無からん　（左氏　哀二）

喪車・旐車　弔祭に用いる車　霊柩車

端衰・喪車は皆等無し　（礼記　雑記上二十）

白馬・旐車を牽く　（世説　霊鬼志）

葱霊　衣服等を載せる車　衣車

葱霊に載せ　其の中に寝ねて逃る　（左氏　定九）

巢車・轈車　車上にやぐらをもつ軍用車

楚子巣車に登り　以て晋軍を望む　（左氏　成十六）

塞門刀車　防戦の具、両輪車に刀槍を多数とりつけて城門を塞ぎ、敵の攻撃を防ぐ

属車・属　お供の車　天子のそえ車　従車・副車

属車軸折れて趁えども及ばず　（白居易　八駿）

鸞旗前に在り　属車後に在り　（十八史略　西漢）

豈に嵇紹の血の属車の塵に霑灑する無からん　（杜甫　傷春）

吾千乗の駕・万乗の属を造り　吾が号名を充さんと欲す　（史記　秦始皇紀）

属車の清塵を犯す　（史記　司馬相如伝）

先駆路に復り属車節を按ず　（文選　東都賦）

大路　天子が天を祭るとき用いる車　参朝のとき用いる車　天子が賜る車

大路に乗り越席して安を養う　（荀子　正論）

大路は繁纓一就　（礼記　郊特性十一）
大路に乗るは諸侯の僭礼なり　（礼記　郊特性十一）
高楼に登る大路に臨み　楽を設け酒を陳ぬ　（列子　設符）

大輅　天子の乗車、のちに諸侯も用う　金や玉で飾る
大輅の服　戎輅の服　（左氏　僖）
大輅　彤き弓矢百・玈き弓矢千　（史記　晋）
大輅鑾を鳴らし　容與として徘徊す　（文選　西都賦）

大車　立派な車　大夫の乗車　牛のひく荷車
大車磊磊長瓶堆し　（陸游　長歌行）
大車の輪を建てて之に蒙らすに甲を以てして以て櫓と為す　（左氏　襄十）
大車檻檻たり　（詩経　王風）
大車を将むる無かれ　祇に自ら塵さん　（詩経　小雅）
大車輗無く小車軏無くんば　其れ何を以てかこれを行らんや　（論語　為政）
大車も較らざれば其の常任を載すること能はず　（史記　田敬仲完世家）
大車の道に当りて覆るに遇う　（国語　晋五）

大駕　天子のみ車　属車八十一乗がつく
大駕平楽の館に幸す　（文選　西京賦）

檀車　堅い檀（まゆみ）の木で作った車　軍用荷車
牧野洋洋たり　檀車煌煌たり　（詩経　大雅）
檀車幝幝たり　四牡痯痯たり　（詩経　小雅）

炭車　炭の運搬車
暁に炭車に駕して冰轍を輾らしむ　（白居易　売炭翁）

馳車　快走車　戦車　軽車
凡そ兵を用うるの法　馳車千駟・革車千乗・帯甲十万　（孫子　作戦）

衷甸　二頭立ての馬車で卿の車又は中型の馬車（中乗）
良天衷甸両牡に乗る　（左氏　哀十七）

輜（緇）車・輜車軒　大夫以上の人が柩を移すのに使う車
天子の命を受けた使臣の乗車　輜軒
輜軒磧岸に臨み　旌節江沱に映ず　（庚信　将命）
君の葬には輜を用ふ　四絑二碑あり　（礼記　喪大記二二）
菆塗龍輴　礼本殺ぐ　（王漁洋）
天子は龍輴にして椁幬し　諸侯は輴して幬を設く（礼記　檀弓下）

朝車　参朝の車
朝車と士の斉車とは鹿幣・豹犢す　（礼記　玉藻十三）

重車・重　戦車　重いものを載せる輜重車
重車梁肉を余棄し　而も士に饑ゆる者有り　（史記　驃騎伝）
孟子の臣秦董父　重を輦きて役に如く　（左氏　襄十）

長轂　車両が特に長い兵車
其の十家九県の長轂九百　（左氏　昭五）

彫輦・彫軫　彫りものの飾りを施した車
已に彫輦を東廂に下す　（文選　東京賦）
天子乃ち彫軫に駕し　駿駮を六にす　（文選　西京賦）

逓　駅の間を走る駅伝車

領して長安を出で逓に乗じて行く　（白居易　縛戎人）

梯衝　雲梯と衝車で、城攻めの武器

旌旗地中に埋め　梯衝城端に舞う　（顧炎武　清詩）

梯衝已に鶴のごとく列なる　（庾信　擬詠懐）

転車　荷物車

転車人徒相い連属し敦煌に至る　（史記　大宛伝）

伝・伝車　宿場間を走る馬車

伝車に乗りて将に河南に至らんとす　（史記　遊侠）

犀を駆り伝に乗りて万里より来る　（白居易　馴犀）

楚内其の冠に纓し　伝車窮北に送らる　（文天祥　正気歌）

伝に非ず遽に非ずして兵革を載すれば罪は死して赦さず　（韓非子　愛臣）

伝に乗りて渤海の界に至る　（十八史略　西漢）

相如伝を擁して光輝有り　（武元衡　唐詩選）

伝は速きが為めなり　（国語　晋五）

伝車を以て范雎を召さしむ　（史記　范雎伝）

田車　狩りの車

周宣王諸侯を合して圃に田す　田車数百乗・徒数千人野に満つ　（墨子　明鬼下）

田車既に好し　四牡孔だ阜なり　（詩経　小雅）

鈿車　青具細工を施した美しい車

鈿車繊手簾を巻いて望む　（牛嶠　酒泉子）

鈿車をして杜陵の路に到らざらしむ　（史達祖　綺羅香）

塗車　泥で作った車で、死者とともに埋蔵する

塗車芻霊　古より之有り　明器の道なり　（礼記　檀弓下）

彤車　赤色の車

黄収純衣　彤車にして白馬に乗る　（史記　五帝紀）

犢車　小牛にひかせる車　牛車

細しく犢車に乗りて後戸を開く　（古詩源　鉅鹿公）

一犢車乍ち浮き乍ち没す　（世説　孔子志怪）

短轅の犢車　長柄の塵尾有り　（世説　妬記）

徳車　乗用の車

兵車には式せず　武車は旌を綏れ　徳車は旌を結ぶ　（礼記　曲礼上）

純車　屯守に用いる兵車

広車・純車の淳ひ十五乗の甲兵備はるもの　（左氏　襄十一）

晋人二子の楚の師を怒らせんことを懼れ　純車をして之を逆えしむ　（左氏　宣十二）

銅輦　銅飾のついた太子の車

台城応教の人　秋衾銅輦を夢む　（李賀　還自会稽）

剣を撫して銅輦に遵ひ　（陸士衡　文選）

道車　天子の車の一種　象路

道右は道車を前むるを掌る　（周礼　夏官　道右）

任負車・任車　荷を積んだ車　虚車に対す

百仞の山にして任負車も焉に登る　（荀子　宥坐）

任車をひいて斉に商いし　（淮南子　商歌）

農輿　無蓋の耕車

戈を立て戛を迤かすあり　農輿輅木あり　（文選　東京賦）

白鷺車　大駕の副車

属車十二乗　白鷺車有り　（唐書　輿服志）

藩車・藩　おほひのある車　まわりを囲った箱馬車

藩車に乗りて閭巷に入る　（漢書　陳遵伝）

藩を以て欒盈と其の士を載す　（左氏　襄二三）

挽輅・輓輅・輅輓　手押し車

挽輅移し難し幸雒の車　（王闓運　清詩）

輓輅を脱し其の羊裘を衣る　（史記　劉敬伝）

庫車　腰の低い車

庫車・軟轝　貴公主　香衫・細馬・豪家邸　（白居易　牡丹芳）

王以て庫車は馬に便ならずと為す　（史記　循吏伝）

皮軒・皮軒車　虎の皮で飾った軒車で、前駆車

鸞旗皮軒　（文選　東京賦）

篳路　雑木や竹で編んだ粗末な車　柴車

之に訓ふるに若敖・蚡冒の篳路・藍縷にして以て山林を啓けるを以てす　（左氏　宣十二）

賦輿　兵車

群臣賦輿を帥い以て魯・衛の為めに請へり　（左氏　成二）

赴車　不幸を告げる車

赴車は櫜韔を載せず　（礼記　檀弓下）

副車・副輅・副乗　そへぐるま

副車に詔し之を載せ車を廻らしむ　（史記　外戚世家）

良　力士をして鉄椎を操って始皇を撃たしむ　誤って副車に中つ　（十八史略　秦）

東園に秘器を賜ひ　上林副車に乗る　（高啓　君子）

轒轀・轒轀車・轒輓　城攻めの兵車

櫓・轒轀を修め　器械を具え　三月にして後成る　（孫子　謀攻）

今の世に常に攻むる所以の者は臨・鉤・衝・堙・水・穴・突・空洞・蟻傅・轒轀・軒車あり　（墨子　備城門）

糞車　肥料を田畑に運ぶ肥え車

走馬を却くるに糞車を以てす　（文選　東京賦）

武車　兵車　戦車

武車には式せず　介者は拝せず　（礼記　少儀十七）

武車は旌を綏れ　徳車は旌を結ぶ　（礼記　曲礼上）

武剛車　兵車の一種

大将軍武剛車を自ら環らし営を為さしむ　（史記　驃騎伝）

文軒・文車　彩絵を施した車　華美な車

其の文軒を舎きて隣に弊轝あればこれを竊まんと欲す　（墨子　公輸）

兵車　戦車　軍用車

桓公諸侯を九合して兵車を以てせざるは管仲の力なり　（論語　憲問）

兵車の会は三たび　乗車の会六たび　（史記　斉太公世家）

兵車に乗りて出づるには刃を先にし　入るには刃を後にす
（礼記　少儀十七）

兵車十七乗　尸して盗を北宮に攻む
（左氏　襄十）

魯の群室は斉の兵車より衆し
（左氏　哀十一）

軿・軿車・軿輅・軿・輜　軿・軿　軒　四方におほひをかけた婦人用車　おほひをかけて敵からかくす兵車　軽車

仙人飄翩として雲軿を下す
（李白　春日行）

周公賜ふに軿車五乗を以てす　皆指南の制を為す
（十八史略　五帝）

未だ輜軿に服いず
（世説　相牛経）

南崖には羅幕充ち　北渚には軿軒盈つ
（陸士衡　文選）

敝車　粗末な車

其れ然らば将に敝車を具へて行らんとす
（左氏　襄二三）

蒲車・蒲輪　蒲で車輪を包んでクッションにした車

古昔封禅には蒲車を為う　山の土石草木を傷めるを悪めばなり
（史記　封禅）

上　使者をして安車蒲輪・束帛加璧を奉じて申公を迎えしむ
（十八史略　西漢）

歩輦・歩輓車　人のひく手車、宮中で天子が用う

毎に深宮裏を出で　常に歩輦に随うて帰る
（李白　宮中行楽）

乗茵歩輦　惟息宴する所
（文選　西都賦）

輜車　兵車　戦車

陳喜　輜車鏃矢を作る
（史記　淮南伝）

輜車・鏃矢を作り　王の御者に與ふ
（史記　衡山伝）

鳳輦・鳳駕・鳳蓋　鳳凰の飾りのついた天子の乗物

鳳輦来らず　春尽きんと欲す
（段成式　唐詩選）

蜺旌鳳蓋長に游宴す
（王闓運　清詩）

嫋嫋たる四春　鳳輦に随う
（王闓運　清詩）

法駕　天子の乗輿、これに大駕・法駕・小駕の三級あり

天子の法駕を奉じて代王を邸より迎う
（史記　呂后紀）

法駕初めて還る日　群公会星の若し
（杜甫　秦州見勅目）

法駕双闕に還り　王師八川に下る
（杜甫　寄岳州）

法駕春に乗じて転じ　神池漢に象りて廻る
（沈佺期　唐詩選）

法駕に乗り華旗を建て玉鸞を鳴らす
（史記　司馬相如伝）

是に於て鸞輿に乗り法駕を備ふ
（文選　西都賦）

賵　死者に贈る車馬、葬礼に用ふ

天主宰亘をして来りて恵公・仲子の賵を帰らしむ
（左氏　隠）

王　栄叔をして含且つ賵を帰らしむ
（左氏　文五）

旄車　から牛の尾を旗ざおの端につけて飾りとした旗を立てた君公の車

冬　趙盾旄車の族と為る
（左氏　宣三）

墨車　周代大夫の乗用した黒塗りの車

大夫は墨車に乗り　士は棧車に乗り　庶人は役車に乗る
（周礼　春官）

縵　飾りのない車、卿が乗る

縵に乗りて挙げず
（国語　晋五）

服を降し縵に乗り楽を徹す　（左氏　成五）

命車　王命により下賜された車

命服・命車は市に粥らず　（礼記　王制）

游車・遊車　先駆車　天子のあとぐるま　遊行の車

麦短うしてまだ遊車の輪を怕れず　（蘇軾　和子由）

戎士は凍餒し戎車は游車の裂を待つ　（国語　斉）

便ち復た別辞を為し　遊車西隣に帰る　（劉公幹　文選）

游闕　游車、闕車をいい、遊撃・予備の兵車

游闕四十乗を率い　唐侯に従いて以て左拒と為る（左氏　宣十二）

輜・輜車・輜軒　軽い車　猟役人の乗る車　天子の使者の乗車

輜車鸞鏘　狝と歇驕とを載す　（詩経　秦風）

輜車は霆のごとく激し　（文選　東京賦）

輜軒は帰僕に命ず　（謝宣遠　文選）

熊軒・熊車・熊軾　車軾に伏竜の画をかいた車

曽経蠆尾に触れ　猶ほ熊軒に凭るを得たり　（杜牧　昔事）

油壁車　油衣を張って雨よけにした車、婦人用

油壁車夕べに相待たん　（李賀　蘇小）

油壁香車再び逢はず　（晏殊　宋詩）

輿　こし、車の人を乗せる所、くるまの総称　のせてゆくもの

輿人輿を成して則ち人の富貴ならんことを欲す　（韓非子　備内）

馬を相するには輿を以てし　士を相するには居を以てす　（古詩源　孔子家語）

輿は六尺　六尺を歩と為し六馬に乗る　（史記　秦始皇紀）

舟輿有りと雖も之に乗る所無し　（老子　下八十）

遙かに聞く鳳吹の喧しきを　闇に識る竜輿の度るを（王維　応制）

長鋏帰らんか　出づるに輿無し　（十八史略　春秋戦国）

智は父の輿なり　勇は文の帥なり　（国語　周下）

金は羽より重しとは豈に一鈎金と一輿羽との謂を謂はんや　（孟子　告子下）

立てば則ちその前に参たるを見　輿に在るときは則ちその衡に倚るを見る　（論語　衛霊公）

輿は柴を曳きて之に従ふ　（左氏　襄十八）

軽輿轡を按じて以て隧を経　（文選　呉都賦）

門に卿相の輿無し　（左太沖　文選）

輿駕・輦駕・輿車・輿輦　天子の乗物　車駕

輿駕京邑に還り　朋遊帝畿に満つ　（杜審言　唐詩選）

出入輿車に乗る　（史記　孟嘗君伝）

輿輦雑沓し冠帯混并　（文選　蜀都賦）

羊車　小さい車で、宮中用　羊にひかせる車

只今弟妹を将い　嬉戯して羊車を牽く　（黄山谷　次韻張）

後宮数千あり　常に羊車に乗る　（十八史略　西晋）

白羊車に洛陽の市上にて乗る　（世説　衛玠別伝）

容車　帷を垂らした婦人用車　死者を乗せる飾りを施した車　魂車

朱輪容車　介子軍陣　葬を送る　（後漢書　祭遵伝）

輜車・輜車・塌車　塩場で柴を運ぶ車

柴を運ぶには必ず輜車・塌車を用ふ　（元陳春　熬波図説）

鸞輿・鸞輦・鸞車・鸞路・鸞駕・鸞軫・鸞

天子の乗物　車前に鈴（鸞）を口にふくんだ鸞鳥の飾りあり

幸に鸞輦に陪して鴻都を出づ　（李白　駕去）

鸞路龍鱗　肸飾せざる罔く　（古詩源　楽府歌辞）

鸞路に乗り蒼龍に駕す　（礼記　月令）

鸞に随いて玉珂を憾かす　（李賀　馬詩）

鑾輿・鑾駕・鑾輅・鑾　天子の乗物、鑾は車の鈴

剣閣雲に横つて峻しく　鑾輿出狩して回る　（玄宗皇帝　唐詩選）

鑾輿湖山の好きを恋ふるに因る　（高啓　趙希遠）

熊罷百万　鑾駕に従う　（陸游　五月十一日）

鑾輿廻かに出づ千門の柳　（王維　応制　唐詩選）

鑾を税いて山椒に登る　（謝霊運　古詩源）

鸞旗　鳳凰の形をした旗を立てた車で、四馬の前駆車

鸞旗皮軒　通帛繡旆　（文選）

鸞旗前に在り　属車後に在り　（十八史略　西漢）

欒車　鈴をつけた車

時に駒は四匹　木禺龍の欒車は一駟　（史記　封禪）

立車　倚乗する車で、安車に対す

稜車　竹や木で組んで作った飾らない車　棧車

駑馬稜車も得て乗る可くんば且つ猶ほ死するを欲せず　（列子　力命）

龍輅　名馬のひく天子の車

龍輅庭に充ちて雲旗霓を拂ふ　（文選　東京賦）

臨衝　攻城の車　臨は上から攻める車、衝は横から突く

車

臨衝閉閉たり　崇墉言言たり　（詩経　大雅）

臨衝茀茀たり　崇墉仡仡たり　（詩経　大雅）

臨車・臨　戦車の一種で、上から敵陣を見下すのに用う

衝・臨・梯は皆衝を以て之を衝く　（墨子　襍守）

軨猟車・軨猟　軽便な小車

太僕軨猟車を以て曽孫を奉迎す　（漢書　宣帝紀）

輦　人がひく車　荷車　天子の手車　王后が娯楽に乗る手車

我が任　我が輦　我が車　我が牛　（詩経　小雅）

輦を引きて高梁に上らんとして支うること能はず　（韓非子　外儲右下）

輦を同じうし　君に随い君側に侍す　（杜甫　哀江頭）

入るときは人主と輿に輦を同じうし　出づるときは輿に車を同じうす　（史記　梁孝王世家）

輦を攀き利に即きて舍る　（国語　晋八）

婦人と衣を蒙り　輦に乗りて閎に入る　（左氏　成十七）

将に死せんとせしとき　公宮に疾み輦にて帰る　（左氏　昭十一）

後庭朝末だ入らず　軽輦夜相過ぐ　（李白　宮中行楽）
細草偏えに承く輦を回らす處　（蘇頲　唐詩選）

輦車　人のひく手ぐるま　輓車

輦車素蓋を飛ばし　従者路傍に盈つ　（劉公幹　文選）

輦輿・輦輅・輦轂　天子の乗物

我は家す輦轂の下　桂を薪とし白玉を炊ぐ　（元好問　寄裴）

路　くるま　天子の乗車、輅に通ず

彼の路は斯れ何ぞ君子の車　（詩経　秦風）
綄して路に乗る者は志輩を食ふに在らず　（荀子　哀公）
将に路を以て葬り　且つ卿の礼を尽くさんとす　（左氏　昭四）
鸞車は有虞氏の路なり　鉤車は夏后氏の路なり　大路は殷の路なり
乗路は周の路なり　（礼記　明堂位十四）

輅　くるま　天子の車　大路　殷の車　柴を用いておほ
ひをした粗末な車、柴車　大きな車

夏の時を行ない　殷の輅に乗り　周の冕を服し　楽は則ち韶舞　（論語　衛霊公）
婁敬輅を委て　其の議を幹し非る　（文選　西京賦）

路車　諸侯や卿の乗車

何を以て之に贈らん　路車乗黄　（詩経　秦風）
路車に乗りては式せず　（礼記　玉藻十三）

輅車・輅鑾　天子の車　大きい車

其の贈は維れ何ぞ　乗馬輅車　（詩経　大雅）
宝鎛　輅車十五乗を納る　（国語　晋七）

輅木　飾りのない車

農輿輅木　属車九九　（文選　東京賦）

鹿車　小さい車　道軌、維車ともいう

此従り青山鹿車を共にす　（龔自珍　清詩）

樓車・樓輣　車上に望樓をもつ車　雲車

諸を樓車に登せ　宋人を呼びて之に告げしむ　（左氏　宣十五）
私かに樓車・鏃矢　戦守の備を作す　（史記　五宗世家）
樓輣坫に居り　城を出づること十二尺　（墨子　備城門）

参考文献図書

(1) 新釈漢文大系、全一〇三巻、明治書院
(2) 漢詩大系、全二四巻、集英社（一九六四）
(3) 大漢和辞典、全十三巻、大修館
(4) 中国古典選、全三八巻、朝日新聞社（一九七九）
(5) 中国の詩人、全十二巻、集英社（一九八三）
(6) 和刻本正史、汲古書院（一九七二）
(7) 全釈漢文大系、集英社
(8) 中国古典文学大系、史記全三巻、平凡社（一九八一）
(9) 中国詩人全集、全十八巻、岩波書店（一九五七）
(10) 唐詩選、全三巻、岩波文庫
(11) 老子、小川環樹、中央文庫
(12) 荘子、森三樹三郎、中央文庫
(13) 論語、武内義雄、岩波文庫

(14) 荘子、全四冊、金谷　治、岩波文庫
(15) 孔子・孟子、貝塚茂樹、世界の名著第三巻、中央公論社
(16) 老子・荘子、小川環樹、世界の名著第四巻、中央公論社
(17) 諸子百家、金谷他、世界の名著第十巻、中央公論社（一九六六）
(18) 中国詩と車、中島、中日本自動車短大論叢十二号（一九八二）
(19) 中国古典と車、中島、中日本自動車短大論叢十三号（一九八三）